ゲーム中の「流れ」の意図的創出に関する社会学的考察

－元バレーボール日本代表加藤陽一選手を事例として－

木戸卓也

The sociological study about the intentional creation of “NAGARE” in volleyball game
-The case study of former Japanese national volleyball player, Kato Yoichi -

Kido Takuya

Abstract

"NAGARE" is becoming an indispensable discourse in all sports scene, recently. And, it is an important factor to decide the winner. Sportscasters often use this word to describe the abstract situation of the game. There are many studies that made the game analysis and research about "NAGARE", but there are not many studies that attempted to approach a humanities and social science to the identity of "NAGARE" or the structure of "NAGARE". The present study aims to grasp the methodological structure for the intentional creation of "NAGARE". The target is a leader with the perspective of coaching, and yet a person that can be advanced semantic interpretation of "NAGARE" in the volleyball Game. I was using a semi-structured interview method for Kato Yoichi of the former Japanese national volleyball player. He is currently enrolled as a coach and a player of Tsukuba United SunGAIA. Then, the conversational data was analyzed. To analyze the date the Grounded Theory Approach was used, Merton’s Self-fulfilling Prophecy was used as a framework of date analysis. Result revealed that the methodological structure for the intentional creation of "NAGARE" consists of three concepts; deal prophecy, strategic prophecy, foreshadowing prophecy. These three concepts are closely related. The core category that incorporates the three concepts was named ‘Fluctuation of prophecy for the creation of "NAGARE"’. Leaders is the absolute donor for player’s prophecy, players are the performer of prophecy. From the standpoint that the leader’s prophecy and the player’s prophecy will not necessarily match, it must be produced the common volleyball dimension between the players and leaders. Therefore, it is we should use the cooperative prophecy toward the intentional creation of "NAGARE". So, we should be focused on the relationship between the leader and players to enable mutual understanding of prophecy.

Key Words：Intentional creation、Self-fulfilling Prophecy、Grounded Theory Approach、fluctuation、Prophecy structure diagram
キーワード：意図的創出，自己成就的予言，グラウンデッド・セオリー・アプローチ，ゆらぎ，予言構造図

Ⅰ．緒　　言

今や「流れ」は，あらゆるスポーツシーンにおいて欠かせない言説となりつつある．実況者や解説者も同様にこの言説を用い，ゲーム展開を抽象的に表現している．特にバレーボールにおいては，サイドアウト制からラリーポイント制へのスコアリングシステムの改正（1999年）がなされて以来，ゲーム展開はよりスピーディーになり，よりリズム感のあるゲーム展開へと変化した．塩見[13]は，「いかなるスポーツにおいてもゲーム中ではムード，リズム，流れがゲームの勝敗を左右する要因の一つとして重要視され，特に6人制バレーボール競技においては競技の性格，性質からみてもっともリズムのあるスポーツといえよう」と述べており，また，手束[16]は，「野球と並んで流れが見えやすい競技は，バレーボールである」と述べている．これらのことから，バレーボールにおける「流れ」の存在は周知されており，ゲームの勝敗を分ける重要なファクターといえよう．

（受付日：2013年8月8日、受理日：2014年1月16日）

新谷[12]は，「団体種目のゲームにおいては，ときとしてそのチームの実力以上のものが出たり，また持っている力を充分に発揮できず，実力以下のゲーム展開を余儀なくされることがある」と述べている．これは，いわゆる番狂わせともいえ，バレーボールも例外でなかろう．手束[17]は，「特に球技の場合は短距離走や跳躍競技、競泳のように人間の絶対能力だけでないものが作用する分だけ，番狂わせが起こる可能性も低くない」と述べており，各スポーツにおける間接的諸条件が，選手に何らかの影響を与え，普段起こりえない状況が生まれることを示唆している．つまり，選手の絶対能力が直接的に反映されず，道具の使用や集団内の人間関係，対戦相手との駆け引き等によって，何らかの影響を与えるスポーツ（特に集団型球技）においては，番狂わせが起こりやすくなるといえよう．さらにバレーボールは，ボールを保持し自ら考える時間がない（キャッチボールの反則[注1)]）ことや，ゲームが次々と展開されていくラリーポイント制等のルール及び競技特性が，「流れ」と深く関連していると考えられる．

鈴木[14]は，「サーブ権の有無に関わらずポイントが獲得できる現在のスコアリングシステムは，高い緊張感の下，よりスピーディーにゲームが展開され，高水準かつ高精

度のパフォーマンスはもとより，成功確率の高いプレーを選択できる能力が要求される」と述べている．しかし，一旦ミスによって高い緊張感の下，スピーディーな展開や拮抗した状況が崩壊することによってプレイヤーに与える反動的な影響は多大であろう．宮坂[9]は，「ミスというのは勝敗の分かれ目にもつながり，悪い循環の状態に入る」と述べており，また，松平[8]は，「一度チームの調子がよくなるとアレヨアレヨというまに点を取ってしまうが，その逆になってしまうと，これが同じチームかと思うぐらいだめになる」と述べているように，ミスが重要なターニングポイントとなり得ることは自明であり，ミスによってパフォーマンスの低下を引き起こし，悪循環に陥る可能性を示唆している点に注目する必要があろう．

以上の知見を含め，ゲーム中の流れに関する研究[19]やゲーム分析を行った研究[2]は多々散見されるが，「流れ」の構造もしくは「流れ」の正体に人文社会学的なアプローチを試みた研究は少ない．木戸[4]は，バレーボールにおけるゲーム中の「流れ」の正体をプレイヤーの言説の特徴を見出すことにより，その構造を探索的に研究している．しかしながら，当該研究の対象であったO大学は，高い競技成績を有していないことから，高い競技成績・競技力を有したチーム，または個人を対象とすることで，彼らの高度な意味解釈から創発されるより深遠な「流れ」の構造を把捉することを課題としている．また木戸は，意図的に「流れ」を創出するための方法を重要視し，コーチングとしての視座を確立させることを課題としている．

そこで本研究では，以下の目的を設定した．すなわち，コーチングの視点を持つ指導者，並びにバレーボールゲーム中の「流れ」に対して高度な意味解釈が可能な人物を対象とすることで，「流れ」の意図的創出に向けた方法論的構造を把捉することとした．換言すれば，以上の作業は，バレーボールをはじめとした各種スポーツ場面における有効なコーチングのあり方について言及することに通じるのではないか．そこで，本研究においては，「流れ」の意図的創出に向けたコーチングのあり方に関しても言及することとなる．

II．研　究　方　法

1．分析枠組み

本研究における分析枠組みにおいては，木戸論文[4]の「II．分析枠組み」の第1パラグラフから第4パラグラフを参照されたい．よって本研究では，マートン[11]の提唱する自己成就的予言と，長谷[1]の提唱する予言の伝播性を分析枠組みとする．さらに長谷[1]は，「予言したこと自体が次なる状況の新たな要因として加わったために，予言された内容が色濃いものとなっている」と述べていることから，個人による予言が集団内に波及し，それが自己言及的にループする予言の循環性を加えて，考察を施したい．

以上の解釈枠組みに基づき以下では，マートンの自己成就的予言とその伝播性・循環性を鑑み，バレーボールゲームにおける「流れ」創出に対する言説を把握することによって，指導者のコーチングとしていかなる予言をすべきなのかについて考察していく．

2．調査の方法

1)対象者の選定と経歴

対象者の選定に関しては，コーチングの視点を持つ選手，並びにバレーボールゲーム中の「流れ」に対して高度な意味解釈が可能な人物として，選手またはコーチとして豊富な経験を持つ元日本バレーボール代表の加藤陽一氏（以下，加藤氏）を対象とする[注2]．

加藤氏は，大分市立上野ヶ丘中学校からバレーボールを始め，大分県立大分工業高校に入学し，男子バレーボール部に入部した．その後，3年連続で全国高等学校総合体育大会（通称・インターハイ）に出場し，1994年には準優勝を果たした．また，全国高等学校バレーボール選抜優勝大会（通称・春の高校バレー）でも，1993年と1994年に2年連続で出場し，1994年には3位になった．筑波大学に進学後，1996年から1998年に全日本バレーボール大学男女選手権大会(通称・全日本インカレ)3連覇を達成した．

1998年には全日本入りし，世界選手権出場を果たす．大学卒業後，実業団である東レ・アローズ男子バレーボール部に入団し，2002年にはVリーグ[注3]準優勝に導いた．同年10月にイタリア・セリエAのプロクラブであるトレビソに移籍し，チーム優勝に貢献する．セリエA優勝は日本人初の快挙である．その後，ギリシャのパオック，フランスのアラゴ・デ・セテ，セリエAのペルージャなどのプロクラブで活躍，2005年7月には帰国，実業団であるJTサンダーズに所属した．2009年には母校の筑波大学などを母体としたクラブチームであるつくばユナイテッドSunGAIAに移籍し，2011年から2012年にかけてのV・チャレンジリーグ[注3]では初制覇した．現在では，つくばユナイテッドSunGAIAのコーチ兼選手として在籍している[注4]．

2)インタビューについて

インタビュー調査の方法は，あらかじめいくつかの質問項目を用意し，その項目に沿ってインタビューを展開していく半構造化インタビュー法を用いる．また，十分詳しく述べられなかった語りの断片や，曖昧な部分に対して別の質問を向けるという作業を繰り返す．インタビュー調査は，2回実施し，1回目，2回目ともに80分間実施する．場所は，1回目は対象者の加藤氏の自宅で，2回目は茨城県つくば市内のつくばユナイテッドSunGAIA事務所で実施する．

3．分析の方法

1)分析手順

会話データの分析作業では，質的データの分析上

のテクニックとして，木下[5]による修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M－GTA）のコーディング法を援用する．木下[5]は，「グラウンデッド・セオリー・アプローチとは，データの解釈から説明概念を生成し，概念間の関係から一つのまとまりのある説明図を理論として提示することである」と述べている．具体的な手続きは以下に示す．すなわち，①分析テーマと分析焦点者に照らして，データの関連箇所に着目し，それを一つの具体例（ヴァリエーション）とし説明概念を生成する，②概念を作る際に，分析ワークシートを作成し，概念名，定義，最初の具体例などを記入する，③データ分析を進める中で，新たな概念を生成し，分析ワークシートは個々の概念ごとに作成する，④概念相互の関係性を考察し，さらにカテゴライズする，⑤概念・カテゴリー間の関係を図として提示する，という手続きである．

2)分析の視点

本研究では，コーチ兼選手である加藤氏の「流れ」に対する意識を把握し，バレーボールゲームにおける意図的な「流れ」の創出過程に関する構造的理解を目的としている．その際，コーチングとしての視点をもとに意図的に「流れ」を創出するという立場から研究を進める．

Ⅲ．結果及び考察

1．概念・カテゴリーの抽出

インタビューデータを分析した結果，6つの概念を生成し，さらに3つのカテゴリーに関して，概念を用いながら説明を加えていく．なお，以下に記す「予言」は，予想やイメージのことを意味する．

1）〔対処的予言〕

このカテゴリーは，【ネガティブ思考の排除】【洗練された準備態勢】の2つの概念によって生成した．これらの概念は，あらゆる状況に対してネガティブ思考を排除し，情報や意思の伝達を図ることによって，ゲーム中におけるプレーの準備・確認を行い，迫り来る戦況に対処することを意味する．

【ネガティブ思考の排除】は下記コメントを具体例として生成した概念である．

「チームの勢いっていうか，勝っている時のイメージをいかにキープできるかっていうところがリズムだと思う．もちろん短長はあるにしても，それをいかにマイナスの方向に行かないようにするかっていうリズムっていうのが，声かけだったりとか，ビッグパフォーマンスだったりとか，そういうところに影響してくると思うんですけど，こういったトップスポーツになってくると，ファンの人たちの声援だったりとか，審判の判断だったりとか，そういうところでもすごく左右される．よく審判が試合を作るような形になってしまうケースもあるんですけども，プレーがスピード化される中で，一喜一憂するところが増えたんじゃないかなと思います．それをいかにプラスの方向にずっとキープしていけるかが，選手の精神的な面もありますし，技術的な面をすごく感じるというのが，リズムのつくり方だと思います．」

【洗練された準備態勢】は下記コメントを具体例として生成した概念である．

「それが戦術であったり，自分たちの戦略を含めて，いかに『こう来たらこう』と認識できることを準備としてやっていかないと，たぶんそういう状況になってしまうので，確認でこのローテ（ーション）は『これとこれでコンビ（ネーション攻撃）があるから』っていうことを理解した上でやらないと，時間の使い方によってそれが頭から飛んでしまうケースもあるので，そういうのもやっていければと思いますね．」（括弧内は筆者による）

【ネガティブ思考の排除】からは，ゲーム中のミスプレー等によって選手らの予言に悪影響を与えないよう，常に自チームにとって不利な要素を取り除こうとする試みが看取される．また，これからのゲーム展開に対してあらゆる状況を想定し，それに対処する方法を具体的に練るために【洗練された準備態勢】を図らせているのである．

以上のことから，選手がプレーを行う前にネガティブな予言の排除，またはそのための準備作業を具体的に行おうとする試みから，〔対処的予言〕を行うことによって意図的な「流れ」の創出を図っているといえよう．

2）〔戦略的予言〕

このカテゴリーは，【戦略的タイムアウト】【戦略的采配】の2つの概念によって生成した．これらの概念は，現段階の戦況に応じて戦力の分析を行い，選手らの予言をスムーズに成就させるためや，相手の予言を阻止するために，戦略的に選手の予言を操作することを意味する．

【戦略的タイムアウト】は下記コメントを具体例として生成した概念である．

「自分たちよりも相手じゃないですかね．相手のリズムがいい時にタイムアウトを取ってのケースが多いんじゃないかな．自分たち（が）空回りしてやる（プレーを行う）っていうケースもあると思うんですけど，たぶん相手に対してのタイムアウトを取るケースのほうが多いんじゃないかなと思いますね．例えば，嫌なサーバーがまわってきて，こっちが負けているときにサーブの準備が必要で，いいリズムがあってサーブをうつ，いいリズムがあってポンっと息抜きするところができると，サーバーっていうのは自分を奮い立たせていくっていうのはなかなか難しいし，しかも8

秒間の中でそれを作るのは難しい．タイムアウトのあとはミスってはいけないというなんかステレオタイプな意識があって，うまくサーブのミスを狙うようなタイムアウトもありますね.」（括弧内は筆者による）

【戦略的采配】は下記コメントを具体例として生成した概念である．

「やっぱりなんでそこに上げたんだとか理由を聞きたくなりますし，例えばコンビネーションにしても，真ん中で絡めたコンビネーションをしているのに，それに近い方のバックアタックを上げたとか，相手が3人いる中でどう分散させるかっていうのが，セッターの力量だと思うんで．そういう駆け引きができないセッターは難しいですし，自分のひらめきで上げてしまうケースが多いと思うので．組立をどうしなきゃいけないっていうのが，セッターとしては重要になってきますね．こっちで罠をかけといてこっちで攻めてとか，逆にこっちで攻めたりだとか，そういう駆け引きをするセッターっていうのが，次のリズムにつながるというか，チーム全体のリズムというのも作れるんじゃないかと思いますね.」

【戦略的タイムアウト】からは，相手選手に時間を与えることによって，相手選手の予言に迷いを生じさせようとする試みが看取され，予言の不明確性やチームにおける予言の不一致を引き起こしているといえよう．また,【戦略的采配】からは，セッターを中心とした緻密なゲームの組み立てを行うことによって，ゲーム中の相手選手に対応した戦略的なプレー，またはそのための采配が行われているのである．ここでいう「采配」とは，指導者によるスターティングメンバーの決定やポジションコンバートはもちろんのこと，選手（セッター）のトスワークを含めたゲームの組み立て方を指す．さらに，それはコート外に広がりを見せ，データの収集が行われ，いわゆるデータバレーが展開されている．眞鍋[7]は,「精度の低い『主観』に頼らず，勝つ確率を高めるために,『精密な数値』の裏付けが欲しい」と述べている．つまり，精密な戦略へと展開することによって，予言の修正を図り，より具体的でポジティブな予言を引き出そうとする〔戦略的予言〕の必要性を示唆している．

以上のことから，状況に応じて戦略を練り，ポジティブな予言を具体的に引き起こそうとする試みから,〔戦略的予言〕を行うことによって，意図的な「流れ」の創出を図っているといえよう．

3)〔伏線的予言〕

このカテゴリーは,【審判との駆け引き】【観客への誘発】の2つの概念によって生した．これらの概念は，審判や観客による影響は多大で，そのために審判や観客に対して布石を打ち，予言における影響を意図的に抑制，また引き起こしていることを意味する．

【審判との駆け引き】は下記コメントを具体例として生成した概念である．

「どっちかというと，パフォーマンスする方なので，できるだけ見逃してもらうっていうのも含めて，コミュニケーション取れる審判であれば,『すいませんでした』っていうことで謝ったりとか言えるんですけど，ダメな人はそれは一発でだめなので，ちょっと探り探りに．パフォーマンスをこっちがすることによって,選手が奮起したりとか,周りのお客さんも盛り上がるじゃないですか．そういうのもプロの選手として必要なパフォーマンスなので，それを認めてくれる審判っていうのは，やりやすいですよね.」

【観客への誘発】は下記コメントを具体例として生成した概念である．

「それは自分たちが煽るというか，こっちから仕掛けるということもありますし，なかなか日本のファンのみなさん，応援してくださる人たちは穏やかじゃないですか．学生が応援するのはアグレッシブになりますけど，ほかの選手を応援したりとか，一般の方が応援してくれたりとか，どうしてもただプレーを見ているだけで，選手のプレーに対して一喜一憂するという感じなんですけど．海外の応援してくださる人っていうのは，サポーターは自分たちでも何かリズムを作ろうとしているので，自分たちが乗らせて選手たちを奮起させようというイメージがあるので，日本は試合を見に来るというバレーボール好きで見に来ることだけで，別に試合の勝った負けた，勝てば嬉しいんですけど，負けても応援している選手が頑張ったからいいみたいな感じがありますけど，海外の人たちはほんとにバレーボールを応援する，勝たせに来るみたいな感じで，サッカーもそうだと思うんですけど，地元の人たちは自分たちのプレーに対して励みにもなりますし，みんなで勝ち取った勝利ということも実際あるので，すごく周りで応援している人が，選手たちの支えだったり，流れももしかしたら作れるかもしれないっていうのはありますね.」

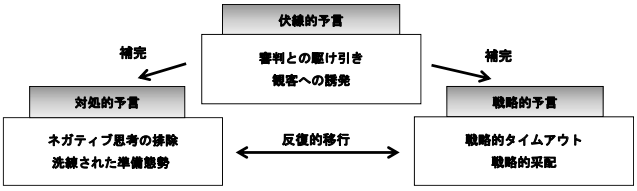
【審判との駆け引き】からは，誤審等によって強制的に選手らの状況や予言を変更する可能性があることを考慮し，審判による選手らの予言への悪影響を最大限抑えるために,審判と駆け引きをしていることが看取されよう．また,【観客への誘発】からは，選手らの予言に対する観客(応援)の影響力は多大で,「流れ」創出における可能性を示唆した上で，さらに観客の期待を誘発し，より選手が奮起してプレーできるよう，ポジティブな予言を引き出す試みが看取

されよう．また，上述した「観客」は，あくまでもプロレベルにおける熱狂的な観客を指すものであり，ただゲームを傍観する観客ではない．加藤氏のコメントからもわかるように，選手がゲームを展開する上で，観客との関係性は重要視されるべきであり，その関係性は色濃くすると同時に強固にする必要がある．この強固な関係性から生じる観客の凝集性が高まることにより，選手らの予言に対する観客(応援)の影響力は増大し，さらなる「流れ」の創出が可能となろう．

以上のことから，ゲームを行う上で重要な影響を与える審判及び観客に対して，事前に仕掛けを図り，ゲーム中における選手の予言への影響を考慮し，〔伏線的予言〕を行うことによって，意図的な「流れ」の創出を図っているといえよう．

2. 意図的な「流れ」創出に向けた予言構造

以上，〔対処的予言〕〔戦略的予言〕〔伏線的予言〕の3つのカテゴリーを生成し，カテゴリー間の関係性を考察した結果，全ての概念・カテゴリーを包摂したコア・カテゴリーとして，《「流れ」創出に向けた予言のゆらぎ》を生成した(図1)．



《「流れ」創出に向けた予言のゆらぎ》

図1　バレーボールゲームの意図的な「流れ」創出に向けた予言構造図

まず指導者は，ゲームにおいて選手に悪影響を与える要因を排除しなければならない．すなわち，【ネガティブ思考の排除】を行い，自チームにとって不利な要素を取り除く．また，そのために【洗練された準備態勢】を取らせることで，いつでも〔対処的予言〕が行えるよう準備する必要がある．さらに，予言をいかにして成就させるかを戦略的に考える必要がある．すなわち，ポジティブな予言を具体的に引き起こそうとする試みとして〔戦略的予言〕が必要とされ，そのゲームにおいて最も有効であると思われる戦略を考え，〔対処的予言〕から〔戦略的予言〕へのスムーズな移行が必要不可欠なのである．指導者は，ゲームが進行していく中で，相手チームの状態を迅速に把握し，【戦略的采配】によって，緻密なゲームの組み立てを行う．さらに【戦略的タイムアウト】を行うことによって，相手チームの予言の不明確性やチームにおける予言の不一致を引き起こしているといえよう．これら〔戦略的予言〕が成就され得点へと具現化されることによって，さらなる予言のポジティブ化が図られるが，〔戦略的予言〕が成就しなかった場合，そのための〔対処的予言〕へのスムーズな移行が必要とされる．つまり，〔対処的予言〕と〔戦略的予言〕との反復的移行を繰り返すことによって，相互の予言を高度に発展させるとともに，予言経験の蓄積を行う必要があろう．

また，これら〔対処的予言〕や〔戦略的予言〕に対して，審判や観客は重要な影響を及ぼすと考えられる．【観客への誘発】にもみられるように，積極的に観客に対してコミュニケーションを図り，ポジティブな予言を引き起こしているといえよう．また，審判に対しては，ゲーム中の予言にどのような影響を及ぼすのか，意図的に審判の人間性や性格を探っているのである．なぜならば，特に審判に関してケルン[3]は，「予期しなかった方向にゲームが展開した結果，コンセプトもなく恣意的に一方に偏った裁定がくだされるという印象が生じてしまい，審判員はゲームに対して，最も重要な影響を及ぼす要因となる」と述べている．つまり，強制的に選手の予言を破壊し，審判は選手に対して重要な影響力を持っていることが看取され，「流れ」創出における重要な恩恵や障害としても考えられる．このように審判や観客による影響は多大で，そのためにゲーム前に審判に対して布石を打ったり，ゲーム中観客に対して意図的に誘発することによって，〔伏線的予言〕が行われるのである．そうした上で，審判や観客から後発的に影響する可能性を含め，〔伏線的予言〕をすることによって，より〔対処的予言〕と〔戦略的予言〕がスムーズに成就されるように補完しているといえよう．

以上の様相を呈しながら，バレーボールのゲーム中に《「流れ」創出に向けた予言のゆらぎ》が進行し続けているものと思われる．「ゆらぎ」に関して尾崎[10]は，「物事の基礎，システム，あるいは人の判断，感情などが動揺し，迷い，葛藤する事態」として捉えている．指導者は，選手らに対して，スピード化されたゲーム状況を正確かつ迅速に分析・対応し，それを伝えなければならない．その中で，一方では，ネガティブな予言を排除，またはそのための準備を具体的に行おうとする試みとして〔対処的予言〕を行い，他方では，ポジティブな予言を具体的に引き起こそうとする試みとして〔戦略的予言〕を行わなければならない，このようなめまぐるしい攻防の中で，新たな予言を何度も創出し，他の指導者や所属する選手との予言の相違，審判や観客からの影響，またその予言成就への可能性に対する迷いや葛藤（「ゆらぎ」）が引き起こされているのではないかと考える．

3. 「流れ」の意図的創出に向けたコーチングのあり方に関する一考察

眞鍋[7]は，「監督の指示ひとつで，何点もの失点して負けたり，その逆が起こることがあるスポーツが，バレーボールです」と述べている．すなわち，指導者は選手の予言に重要な影響を与えていること，また，指導者は選手にとって絶対的な予言の援助者なのである．吉田[20]は，「選手がどんなボールがこようと監督からの課題遂行を第一義と考える」と述べており，

指導者は選手の予言に対する強制力を持ち，選手個人の予言を操作していることを示唆している．これらのことから，指導者の一方的な予言が行われることによって，選手の予言は規定されることになるが，はたして指導者の一方的な予言の援助が選手の予言に影響することによって，「流れ」の創出が可能なのであろうか．

加藤氏は，以下のように指導者と選手の目線の違いからコメントしている．

「やはり目線の違いもあると思うんですよね．縦で見るのと横で見るのとで違うと思うので，僕自身監督として，また監督兼選手というのもあったんですけど，なかなかゲームに集中しすぎて，全体の流れというのが見えなくて．自分自身タイムを取らなくても，次切り替えればいいやって思ってる中で，他の選手たちにはあせりが出てきたりとか，迷いがある中で，ちょっと逃げたいなって思った中で，なんでタイム取らないんですかみたいなこと言われたりとか，他の選手は乗ってるけど，ここ冷静に行こうかってタイムを取ってしまうと他の選手たちのリズムを崩したりもするので．」

加藤氏のコメントから分かるように，選手の予言と指導者の予言は必ずしも一致しない．吉田[20]は，「指導者と選手の間に共通のバレーボール的次元を作り出さなくてはならない」と述べているように，指導者は選手と同じ目線に立ち，バレーボールに関するあらゆる事象を共有する必要がある．また俵[15]は，「コーチがチームに影響をするだけでなく，チームもコーチに影響を与える」と述べているように，指導者は選手への一方的な予言をするのではなく，選手の予言も視野に入れ，「流れ」創出に向けた予言をするべきなのである．

ここにコーチングのあり方がみえてこよう．すなわち，指導者と選手間に存在する同次元における相互連関的な関係性を構築し，「流れ」創出にむけた予言を行う必要があろう．

4．「流れ」の概念と定義

「流れ」の概念は，ただ単なる得点推移における客観的な現象として捉えるべきではなく，選手を取り巻く内面的な現象として捉えられよう．さらに，予言が自己言及的にループする自己成就的予言の特性に鑑みれば，そうした予言が連続得点や連続失点として具現化された状況が「流れ」と捉えられるのではなかろうか．

「連続得点が多い．セット毎に連続得点を取るケースが，こういうたすき掛けのデータを取っていくと，連続得点を取ったチームが優位な展開になってますし，それが多ければ多いほど，点数の差が離れていくので，そこが流れの一つなんじゃないかなって思いますね．」

こうした加藤氏のコメントから，連続得点・失点による「流れ」の捉え方が示唆され，バレーボールのスコアリングシステムも相まって，連続した点数を獲得することによって我々は「流れ」を確認することとなる．上述したように，予言が自己言及的にループする特性に鑑みれば，予言に対する迷いや葛藤(「ゆらぎ」)が惹起され，それが成就し続けた際に，「流れ」は創出されるものと考えられる．すなわち，「流れ」とは連続的に獲得された点数に伴って，予言が成就し続けるループ現象として捉えられよう．

Ⅳ．まとめと今後の課題

本研究では，バレーボールゲームにおける「流れ」の意図的創出に向けた方法論的構造を把捉することを目的とした．対象者としては，コーチングの視点を持つ指導者，並びにバレーボールゲーム中の「流れ」に対して高度な意味解釈が可能な人物であるつくばユナイテッドSunGAIAコーチ兼選手の加藤氏とした．加藤氏の「流れ」に対する意識を把握し，インタビュー調査によって得られた会話データを分析した．その際，木下[5]のグラウンデッド・セオリー・アプローチのコーディング法を援用し，マートン[11]の自己成就的予言を枠組みとして捉えた．その結果，複数の概念抽出がなされ，〔対処的予言〕〔戦略的予言〕〔伏線的予言〕の3つのカテゴリーを抽出するに至った，また，これら3つカテゴリーを包摂するコア・カテゴリーとして，《「流れ」創出に向けた予言のゆらぎ》の導出をみることとなった．指導者は，スピード化されたゲーム状況の中で，他の指導者や所属する選手との予言の相違，予言成就への可能性に対する迷いや葛藤（「ゆらぎ」）が惹起されているのである．また，指導者は選手への一方的な予言をするのではなく，選手の予言も視野に入れ，「流れ」創出に向けた予言をするべきである．すなわち，指導者と選手間に存在する同次元における相互連関的な関係性を構築し，「流れ」創出にむけた予言を行う必要があろう．

よって今後は，異次元にある複層的な「流れ」創出に向けた予言を解消し，スムーズな予言の相互理解を可能とするべく，「流れ」に身を置く選手とそれを客観的な視点から眺める指導者との関係性に焦点化する．その上で，「流れ」創出に向けた予言の相互作用構造を解明することが課題となり，新たなコーチングの社会学的方法論を確立していきたい．

さらに，本研究では「流れ」というキーワードを用い，インタビュー調査を行う際に，「流れ」に関連する「リズム」や「波」，「テンポ」といったプレーの内容を抽象的に表す言語が多々散見された．今後の研究において，それらの言語の概念や定義を明確にした上で，「流れ」の本質を捉えていきたい．

Ⅴ．謝　　辞

本研究の実施にあたり，調査実施にご協力いただいた加藤陽一氏に対し，心から感謝致します．また，ご多忙の折，本研究に対し熱心にご指導いただきました谷口勇一先生に対して，末尾ながら感謝の意を表する次第であります．

Ⅵ．注　　釈

注1)キャッチボールは，競技者がボールをヒットせず，ボールを掴んだり，投げたりする反則である．

注2)加藤氏の実名記載に関しては，事前に本人の承諾を得ている．

注3)Vリーグとは，1994年発足の日本国内の社会人トップリーグである．2007年に従来の上位リーグであるVリーグは「プレミアリーグ」，下位リーグであるV1リーグも「チャレンジリーグ」に変更され，一般社団法人日本バレーボールリーグ機構と公益財団法人日本バレーボール協会が共催している．

注4)記載内容は，つくばユナイテッドSunGAIAホームページ及び，「天才は親が作る」による．

Ⅶ．引用・参考文献

1)長谷正人：悪循環の現象学―「行為の意図せざる結果」をめぐって―，ハーベスト社：東京，p.10，1991.

2)藤原徹：スコアグラフによるバレーボールのゲーム分析について，仙台大学紀要第13号，pp.23－34，1981.

3)ヤーンケルン（Jan Kern）：スポーツの戦術入門，大修館書店：東京，p.3，1998.

4)木戸卓也：バレーボールにおけるゲーム中の「流れ」に関する社会学的考察―大学生プレイヤーの会話データに対する質的分析作業をもとに―，バレーボール研究第14巻第1号，pp.28－35，2012.

5)木下康仁：グランデッド・セオリー・アプローチの実践―質的研究への誘い―，引文堂：東京，p.191，pp.236－237，2003.

6)前田直樹：自己効力感とスポーツパフォーマンスとの相互作用，九州保健福祉大学紀要4号，pp.233－237，2003.

7)眞鍋政義：「精密力」～日本再生のヒント～，主婦の友新書：東京，pp.29－30，p.33. 2011.

8)松平康隆：負けてたまるか！，柴田書店：東京，pp.24－25，1972.

9)宮坂俊樹：高校生とミス，Coaching & Playing Volleyball48号5/6月号，pp.15－20，2007.

10)尾崎新：「ゆらぐ」ことのできる力―ゆらぎと社会福祉実践，誠信書房：東京，p.307，1999.

11)ロバート・K・マートン：社会理論と社会構造，みすず書房：東京，pp.384－385，1961.

12)新谷崇一：バレーボールのゲーム中における“リズムの変化”に関する理論的研究：StrategyとTacticsの関係より，日本体育学会大会号(35)，p.623，1984.

13)塩見雅文：バレーボールのゲーム分析リポート：京都創成大学バレーボール部（6人制）におけるサーブとリズムについて，京都創成大学紀要31（1），pp.43－46，2003.

14)鈴木淳平：バレーボールのゲーム分析：得失点の経緯がゲーム展開に及ぼす影響，駒沢大学保健体育研究紀要18号，pp.21－28，2002.

15)俵尚伸：コーチングにおける動機づけについての一考察，嘉悦大学研究論集44（1），pp.81－91，2001.

16)手束仁：高校野球に学ぶ「流れ力」，サンマーク出版：東京，pp.145－149，2008.

17)手束仁：流れの正体―もっと野球が好きになる―，日刊スポーツ出版社：東京，p.162，pp.190－191，2010.

18)植田恭史：コーチング研究〔IV〕：指導者の言葉，東海大学紀要体育学部36号，pp.65－71，2006.

19)米沢利広：バレーボールゲームの「流れ」に関する研究―連続失点と勝敗の関係から―，福岡大学スポーツ科学研究41（1），pp.1－7，2010.

20)吉田雅行：スポーツ技術に内在する意味について―バレーボールのコーチングを通して―，大阪教育大学紀要第Ⅳ部門第44巻第2号，pp.283－294，1996.

21)吉田敏明：バレーボールにおける戦術データと駆け引き，オペレーションズ・リサーチ：経営の科学 51（7），pp.441－444，2006.

22)吉井妙子：天才は親が作る，文藝春秋，p.162，2007.